

防災歳時記 (27)

—恐ろしいゲリラ雪—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

ゲリラ雪とは

「世界有数の多雪地日本。高速道路も、冬は半分は雪の中です。道路公団は、社会と暮らしの“動脈”を守るため、全力をあげて雪氷対策に取り組んでいます。

—中略—

名神高速道路の養老 S.A と八日市 I.C 間は、地形と季節風などの関係から雪が降りやすく、しかも時と所を変えて突発的に襲ってきます。この雪は、ゲリラ雪と呼ばれ、とくに入念な除雪対策が必要となっています。」(日本道路公団ハイウエーニュース、1990年12月)

このニュースにあるように、滋賀県琵琶湖東岸の多賀町、甲良町付近は、ゲリラ雪が降りやすく、スリップ玉突き事故が発生しやすい魔の場所である。

ゲリラ雪ということばは、道路関係者の造語で気象用語にはゲリラ雪、ゲリラ豪雨はない。気象専門家は、俗称としてこのことばを使うことがある。雨や雪の降る場所が単純に西から東へ移動するのではなく、局地的にあちらで降ったり、こちらで降ったり、場所を変えて降る雪や豪雨のことをいう。



写真1 伊吹山(標高1,377m、山頂に測候所がある)

ゲリラとは、小部隊で敵のすきをうかがい、奇襲を繰り返して敵の戦力をかき乱す戦闘のことである。ゲリラ雪とは、誠に言い得て妙であるが、語感が強烈で軍事的であるので不快感をもつ人がいる。

ゲリラ吹雪多し減速

ゲリラ雪が世の注目の的になったのは、次の玉突き事故である。

1985(昭和60)年1月17日午後2時過ぎ、滋賀県犬上郡甲良町の名神高速上り線で乗用車、トラックなど計40台が次々と追突事

故を起こし、1人が重体、8人が重軽傷を負った。現場は吹雪のため視界が悪いうえ、路面がスリップしやすい状態だった。

安心して走っていると急に雪が降ってくる。すると前方が見えないので、スピードをだしていた車が次々とブレーキを踏む。路面が雪でシャーベット状になっているので、ハンドルをとられて乗用車が前のトラックに追突、さらに別の大型トラックがそれに追突する。この事故がきっかけになって、上り線が約500mにわたって9カ所で追突事故が発生した。

雪は、現場の周囲2kmの範囲だけに局地的に降り、雪の降るのはわずか2、3分間。関ヶ原が晴れているのに、そこからわずか25km離れた甲良町付近にだけ降る。道路公団では、約5kmおきに降雪計を配置してあるが、その網目をくぐって降るから始末が悪い。伊吹山のふもとの関ヶ原の雪も甲良町の雪も、新幹線やクルマにとっては悩みの種である(写真1)。

この事故の翌年1986(昭和61)年の冬には、甲良町付近の道路上に「この付近ゲリラ吹雪多し減速」と書いた横断幕が掲げられた。予告なしにやってくる雪に対するせめてもの警告である。

雪の備えしっかりと

ゲリラ雪の降る理由は、わからない点が多いが、およそ次のことが考えられる。

一般に、雪は、西高東低の気圧配置で北西の季節風の吹くときに降る。そのとき季節風の風向きが少し違うだけで、関ヶ原で降ったり、甲良町で降ったりする。

伊吹山測候所(標高1,376m)の風向が北西



写真2 道央自動車道多重玉突き衝突事故
(千歳市消防本部提供)

から西北西のときは関ヶ原付近で雪が降りやすく、風向き北北西から北寄りに変わると、多賀町・甲良町付近で雪が降りやすい。

上空の北北西の風が鈴鹿山脈の西側の山腹にぶつかり、反転した東寄りの風が琵琶湖を渡ってくる西風と衝突して、多賀町・甲良町付近に不連続線をつくる。この線に沿って雪雲が発生し、ゲリラ雪を降らせるらしい。

1992(平成4)年3月17日午前8時50分ごろ、北海道千歳市上長都付近の道央自動車道上り線で発生した車両186台の玉突き衝突事故は、悲惨さを通り越して、まさに壮絶だった。関係車両の多さに加えて、死者2人、重軽傷者108人をだし、高速道路の玉突き事故としては世界有数の大事故になった。わずかな時間に1時間当たり10cm以上の局地的な大雪が降り、ドライバーの視界を妨げた(図2)。

雪道ではタイヤチェーンなどの装備、気象・道路情報の把握、そしてスピードを抑えた控え目な運転、この3つが大原則である。(参考文献:宮澤清治,1999,近現代日本気象災害史イカロス出版)